

フラグメンツ第4回

1 酔芙蓉のおすそ分け 『身辺記』

①山里の住民は皆高齢なので、付き合いは淡い。会えば挨拶はするが、淡々としたもので深い付き合いはない。ところが、このところ妻への誘いが多い。コロナ禍で人恋しくなるのだろうか。

②酔芙蓉（写真）は不思議な花である。朝は純白だが、夕方になるとピンクに変わる。はじめわたしは白とピンクの別々の花だと思っていた。



妻がひとり散歩中に、手入れの行き届いたある庭の酔芙蓉を見ていると、「お好きですか？」と奥方が話しかけてきた。

「夫が大好きで・・・」と妻が答えると、「差し上げますよ」と奥方からの申し出。

妻が躊躇していると、80センチほどの酔芙蓉をわざわざ拙宅まで届けてくれた。しかも花の栄養剤つきである。恐縮！

③そうかと思うと、知人から妻に電話がかかってくる。わざわざ電話がくるとは珍しいことである。彼は山野草が趣味である。

「庭の花がきれいです。ナンバンギセルを写しに来ませんか？」

妻が訪ねてみると、ナンバンギセルはあまりにも地味である。結局、妻はひとしきりイヌタデや風知草を写すのに集中した。山野草の研究家と写真家では、目のつけどころも花の好みも違う。

④写真を撮り終わると、彼がガザニアとノカンゾウをおすそ分けをするという。

それだけでなく、拙宅まで持ってきて植えてくれるという。われわれ夫婦は、花を愛でるだけで園芸は不得手。二人とも「口舌の徒」と見抜かれている。

⑤拙宅での植栽には小一時間ほどかかった。恐縮してお礼を述べると、「花の手入れをするのは楽しくて、時が経つのを忘れるからお構いなく」との事。花の手入れをする時間は「我を忘れ

るひと時」だそうである。

妻にとっての写真と同じく、彼には園芸が「生きがい」なのだろう。人は皆それぞれの世界を持っているものだと、妻はひとしきり感心のていである。

⑥妻はこの辺で花の写真を十数年とり続けている。女性がプロ用の大型カメラや機材を手に、小径や雑木林や野原で写真を撮っているので、どうしても目立つ。しかも毎日である。

路傍の花を写していると、「何の花を撮っているのですか」と話しかけてくる散歩中のシニアが多い。花好きもいれば、写真ファンの人もいる。

ときには軽トラを道の真ん中に止めて、「花を撮るなら、この道を上っていくと、写しごろのしだれ桜が咲いているよ」と延々と話しかけてくる超シニアの村人もいる。「超シニア」は妻を知っているらしいが、妻は彼を知らない。

⑦というわけで、この辺では妻が主人公で、わたしは「花の写真家の旦那さん」で通っている。要するにわたしは刺身のツマである。

2 「やる気」は健康のバロメーター (『身辺記』)

①老年になると、ささいな気づきが大きな意味をもつことを知る。

妻は今日も元気である。朝から太極拳をやっている。しかし、わたしはここ数ヶ月ピリッとしている。気力がみなぎらない。

②50代半ばまでは、気力を保つのに苦労はしない。だが、60代後半になると、何事もやる気を保つのに一苦労である。意識的に精神の手入れをしないと、ズルズルと怠惰な日々を過ごすことになる。

③睡眠時間は約6時間。夜中3度ほど目が覚める。眠りの質は良くない。朝目覚めてからも、ベッドで30~40分ダラダラしている。ショパンやモーツアルトのピアノ曲を繰り返し聴きながら、やっと起き上がる。古いパソコンのようなもので、起動するのに一苦労である。

④午後になるとぐったりと疲れる。30分ほど昼寝をしようと思って、つい1時間、1時間半と寝てしまう。「無呼吸睡眠症候群かも」と思っても、医者に行く気もない。

書く原稿がたまっている。しかし、気力が湧かない。やる気というのは恐ろしいもので、どうにもならない。

⑤ふと気づいた。そういえば、長く空咳が続いている。夜中も咳でときどき目が覚める。医者が「薬を飲むほどではない」というので、何の治療もしていないが、咳も体調不良の一因かもしれない。

以前、薬剤師のJさんから「小青竜湯が効く」と勧められて飲んでいた。その時は調子がよかつた気がする。何でやめたのか記憶はない。喉が渇くとか、トイレの回数が増えたとか、お腹が緩くなるとかだったろう。

⑥小青竜湯は、鼻炎、花粉症、気管支炎、気管支ぜんそくに有効とされる漢方薬である。

用量は「成人は1回1包み」とある。考えてみれば、わたしも体力的には落ちて、成人並みの量は多すぎるに違いない。体力は12歳並みとして、3分の2包みで十分であろう。成人の量を用いては、体が薬を代謝しきれず、小さな不具合が生じる。そう思い当たって、用量を減らした。

⑦これがアタリ。10日ほど飲み続けると、咳の回数が減ってきた。3週間もすると睡眠の質もやや改善し、気力も戻り始めた。気分よく目が覚める日も多くなってきた。本当に漢方のおかげか、または、涼しい季節になったせいか分からない。とにかく原稿を書く気が戻った。やる気はわたしの健康のバロメーター。当分、小青竜湯はやめられない。

3 わたしには人徳がない（『処世論』）

①ビジネス・ローヤーにしては、わたしは非社交的な人間である。世の中に打って出たいと思わないし、他人の評価も気にならない。

他人がわたしをどう思うと、わたしはそれをコントロールできない。「わたしはわたし。他人は他人」である。「他人の評価を気にしていては、一生満たされることがない」と思っている。どこかの政治家のように、人気投票や世論調査で一喜一憂するなど、愚かの極みだと思っている。

②だからこんな風に生きてきた。

- (1) 他人を気にしない。
- (2) 他人を羨まない。
- (3) 自分の道を行く。

③小学校から大学まで同じだった友は、30代半ばで過労死した。妻の恩師で何かと目をかけてくれた「兄貴」も、50代はじめに急逝した。会社を辞めてから30年も交友が続いた年少の友

人も、50代半ばでガンに倒れた。皆ビジネス抜きの付き合いだった。よき先輩・同輩・若き友人との交友は淡く短い。

④わたしには人徳がない。だから、周りに人が集まらない。それでも大して困らない。妻は「パパは、もうちょっと世間的な付き合いをすればいいのにねえー」という。もっともある。しかし、わたしはビジネス絡みの社交に楽しみを見いだせなかった。

⑤日米3つの大学を出たので、同級生/同窓生は多い。だが、この年になると同級生だからといって、懐かしい事はない。同窓会から今でも連絡が来るが、全く興味がない。「もう少し素直なほうがいいんじゃないの」と自分でも思うが、懐古趣味の会合に出ても面白くもない。

⑥「精神の貧しい者ほど孤独を嫌う」とは、悲観主義者ショーペンハウアーの言葉である。
彼ほど孤独を好むわけではないが、自分の道を行くほど安穏なことはない。孤独こそ精神の東屋あずまやである。孤独を楽しむことができれば、哲人でも難しい「心の平安」に、少し近づくことができる。
とはいって、このように世間をハスに見る考えは、老化による視野狭窄のせいかもしれない。ご注意を！

4 「直視思考」ということ（『思考論』）

①世の中には虚偽と偽善が蔓延しているが、現実を正確に把握できれば、多くの争いは防げる。たいがいの不幸は避けられる。ところが、現実にはなかなかそういうかない。われわれには常識や先入観というベールがかかっていて、物事の本質を「直視」することを妨げているからである。

②「直視」とは何か？ 他の辞書と比べ、新明解国語辞典の定義は相変わらず面白い。

「過大（過小）評価などの先入観を全く抜きにして、真実を正しく見つめること」。

「先入観を全く抜きにして物事を見つめる」ことも、「真実を正しく見つめること」も、困難な作業である。というより、ほとんど無理な相談である。われわれはもともと先入観の塊だから。

③そうはいっても、わたしは絶え間ない変化の中を、知恵を尽くして生き抜いていかなければならない。それが生きる者の宿命である。現実を直視するため、わたしは以下のポイント（=直視思考）を心掛けている。

- (1) 言葉を疑うこと。
- (2) 常識/先入観にとらわれないこと。
- (3) 事物の物理的機能を重視すること。
- (4) 人の装飾物を削ぎ落すこと。
- (5) 権力/権威/専門家を疑うこと。

④以下は、わたしなりに直視思考を生活やビジネスに生かしている例である。

警備会社に自宅の警備を頼んで十数年になるが、鍵は預けていない。当初、会社は「鍵を預かるのが決まりになっています」といったが、そんなバカなことはない。会社がどのように鍵を管理するのかわたしは知らない。どのような人が鍵を管理するか全く知らない。その担当者を100%信じができるか知らない。何名の担当者が鍵にアクセスできるのかも知らない。要するに鍵を預けることは、何の根拠もなく丸々相手を信用することである。そんな無防備なことはできない。結局、鍵は預けないことで会社も納得した。

実際、顧客から預かった鍵を使って、警備先の家屋で盗みを働いた例が、昔も今も報道されている。性善説を信じていると痛い目に会う。

⑤かつて住基ネットの導入が問題になった時、有名大学の某教授が「住基ネットはクローズド・システムだから絶対安全だ」と述べていた。詳細は避けるが「クローズ系だから絶対漏れない」というのは間違い。内部の者の故意/重過失が重なって、クローズ系の情報が漏れる例はよく知られている。教授は、セキュリティの甘い現場の実態を知らないに違いない。

（注）秘密情報が漏れるのは、主に次の3つの場合である。（1）内部の者が故意に持ち出す。

（2）内部の者の（重）過失で流出する。（3）外部からの攻撃。

住基ネットの個人情報漏れは遅かれ早かれかならず起こる。「クローズ系だから・・」という言葉に惑わされたり、権威者のコメントだからと丸呑みすると、危険は隠れたままいつまでも続く。「リスクゼロ」を唱えるなど、専門家にあるまじき意見である。

⑥取引先からマイナンバーの提供を何度か求められた。判を押したように「個人情報は厳重に守ります」と依頼用紙に書いてある。だが、それは単なる言葉の遊びに過ぎない。

取引先がどれほど厳重なセキュリティ対策をしているか、言葉だけでは全く不明。言葉は厳重に管理しているかのようなイメージを醸し出すだけ。言葉は現実ではない。われわれがよく陥る罠である。

取引先はわたしのマイナンバーをパソコンで管理するのだろうが、誰がアクセスするのか、アクセス権の管理は十分なのか、わたしは全然知らない。提供した後はすべてお任せである。

⑦一般に、日本企業は海外企業に比べてセキュリティが大甘である。取引先からわたしのマイナンバーが漏れるリスクは当面低くとも、5年、10年の長い間では漏れるリスクは無視できない。だから、わたしは急いで返事しない。回答しないでも、そのままやむやになる取引先もある。

せめて身を守るために、わたしはマイナンバー・カードを作らない。政府は「リスクゼロ」論ばかりを唱えて、リスクのあることを正面から認めない。だから、庶民の不信は募るばかりである。

(2020年9月27日記す)